



せつちやくざい



きんぎゅうしゅうりつぶんがくかん
北九州市立文学館が
令和二年度に募集した
第十一回

「あなたにいたくて生まれてきた詩」
コンクールの受賞作品の中から
京都市の小学六年生の
『せつちやくざい』という詩を
紹介します

『せつちやくざい』

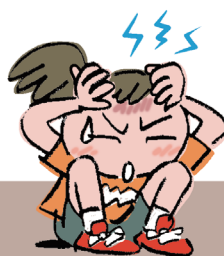
「ごめん…ごめんね」
そう言いたいだけなのに

口がせつちやくざいで
ひつつけられたみたいに
開かなかった



目の前には

みけんにしわをよせて
うちがなげたボールが
あたってしまった
額をさわる友達



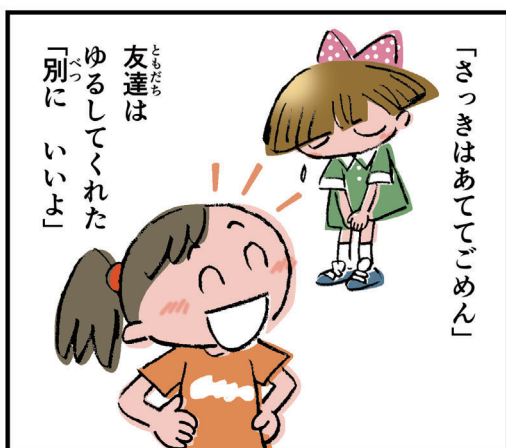
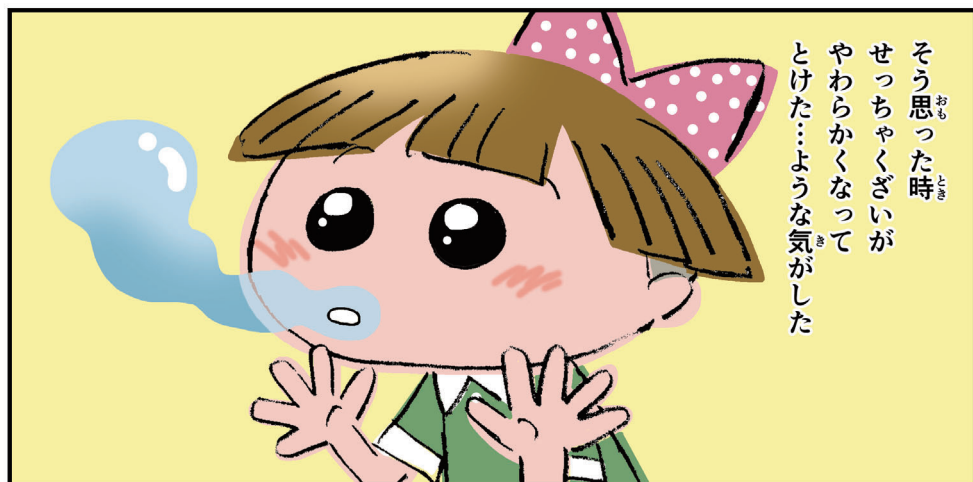
うちが
なげたボールは
バッチンで
すごい音をたてて
友達に
あたってしまった



思い返すと
強くながってしまった
うちが悪い…



うちが悪いんだ



心の中では「ごめん」と
思っているのに



その言葉をすぐに
口にできなかった理由を

作者は
「口が接着剤で
引っ付けられたみたい」と
表現しています



この時
「接着剤」となったのは
作者の動揺や
困惑だったのかも
しれませんね



でも
作者はすぐに
自分のしたことを
思い返してみました

そして
ボールを強く投げてしまった
「うちが悪い」と



すなお
みと
素直に認めることが
できたのです

